

近代家族と「少女」の国民化

—少女雑誌『少女の友』分析から—

今田 絵里香

1. はじめに

近代が家族にもたらした変化は、アリエス (Ariès 訳書 1980), ショーター (Shorter 訳書 1987)ら西欧の家族史研究によれば、家族の形態や規模の変化ではなく、むしろ、母子関係を中心とする家族内構成員相互の心的関係の濃密化であったことがあきらかにされている。このような近代の家族変動についての研究成果をふまえ、近年、日本でも、明治後期に愛情中心の近代家族イメージが一部の知識人によって唱えられ、そしてそれが大正から昭和初期にかけて都市の新中間層を中心に実態化していったことが、新聞や雑誌、書物の分析をつうじてあきらかにされはじめている⁽¹⁾。

このような母親から子どもへの愛情の濃密化を考えるにあたって、とりわけ日本においては、近代国民国家の建設とともによき国民の養成が国家的課題となったことから、よき国民を生み育てる女性の母役割になみなみならぬ関心がよせられたことに焦点があてられてきた。そして、そのように、女性に対し母性の重要性が説かれ、良妻賢母主義教育がなされるようになったことが、その主要な要因であると考えられてきた⁽²⁾。そこでは、女性は子どもを育て、教育することによって、あるいは夫を支えることによって、間接的に国民としてとらえられるとされる。すなわち、職業や兵役などをつうじて直接的に国民国家を担うことになる「直接的な国民」を育て、教育することで、あるいは直接的に国民国家を担っている「直接的な国民」を支えることで、「間接的な国民」としてとらえられていくと考えられている。

しかし、近代の女性は「妻」あるいは「母」でしかあり得なかったのだろうか。こ

れは、近代に誕生した⁽³⁾少女と人妻の間の宙吊りな時間を生きるとされる（本田 1990）「少女」をどのようにとらえたらいいのかという疑問にも結びつく。これまでの研究では、近代の女性のジェンダー規範は女性の「妻」、「母」という側面、すなわち良妻賢母という規範のみで片づけられてしまいがちであった。確かに、近代の「少女」は、一方で、学校の良妻賢母主義教育において、次代の国民を愛情かけて育成・教育する未来の「良妻賢母」としてとらえられていたが、他方で、実際にはまだ妻とも母ともならない「子ども」でもある。はたして、「子ども」を愛護し教育するための「良妻賢母」の予備軍と、近代家族のなかで慈しまれ愛される存在としてとらえられる「子ども」の狭間のなかで、少女たちはいかなる位置にあったのだろうか。そして、新中間層を中心に近代家族が理念化・実態化していくなかで、それはどのような変遷をたどるのだろうか。

本稿ではそれをあきらかにするため、実業之日本社刊の少女雑誌『少女の友』の掲載小説にあらわれた少女とその家族との関係をみていくことにする。ここで少女のみではなく、家族との関係のなかから少女をみていくことにしたのは、「子ども」と「良妻賢母」、そのどちらも家族との関係のなかで成り立っているものだからである⁽⁴⁾。また、少女雑誌を分析の対象と選んだのは、修身教科書を分析し、女子教育論を調べるというこれまでの方法では近代の少女とその家族との関係を充分にあきらかにできないと考えるからである。それはそれらが未来の「良妻賢母」というまなざしのみをあらわしているものだからであり、それら学校教育が有害なものともみなした（遠藤 1993 a）少女雑誌は、それとは別の「少女」へのまなざしを示していた可能性があると考えからである。しかもそのなかでも『少女の友』を選んだのは、第一に、近代に誕生した他の少女雑誌にくらべてもっとも長く続いた雑誌だからである。第二に、講談社の『少女倶楽部』（大正12年創刊）にはかなわなかったものの、『少女の友』は常に購読者数の多い雑誌であったからである⁽⁵⁾。第三に、『少女倶楽部』が地方の小学生や女学生に受け入れられていたのに対し、『少女の友』は意識的に東京の山の手や京阪神のいわゆる大都市の女学生、すなわち近代家族をいち早く実態化した新中間層の少女たちに向けて誌面づくりをしていたからである⁽⁶⁾（遠藤 1993 a）。

いうまでもなく、少女雑誌は少女やその家族の心性を直接的に反映したものであるとはいえないため、本稿であきらかになるのはあくまでも少女とその家族の心性についての少女雑誌における表象である。しかし、少女雑誌は近代の少女たち、特に近代家族を実態化した新中間層の少女たちがもっとも頻繁に接したメディアである⁽⁷⁾。したがって、本稿であきらかになるのは、少女とその家族の心性についての少女雑誌に

おける表象であるが、それは同時に読者である新中間層の少女自身が自らとその家族の心性について社会的に共有されていると思っていたものでもあると考えられる。すなわち、社会的観念（山村 1971）、社会意識（坂本 1997）としての新中間層の「少女」とも考えられるのである。

2. 分析の方法とその視点

『少女の友』は同じ時代の他の少女雑誌同様、小説が誌面のほとんどを占めている。そのため、本稿ではその掲載小説の物語の構成から、主要な登場人物の少女とその家族の心性やふるまいを質的な分析を中心にみていくことにする。そして、その質的な分析をもとに、それぞれの時代ごとの数量的な傾向をつかむため、『少女の友』の分析の対象となった掲載小説すべてを、まず、少女から親への献身がみられる小説（「少女→親」）と、親から少女への献身がみられる小説（「親→少女」）に分類する。両方みられる場合は両方に分類する。また、同じく分析の対象となった掲載小説すべてを、少女がきょうだいのうち誰と情緒的な絆をもつのか、ということによって分類する。その結果が表1である。

次に、質的な分析をおこなうにあたって二つの視点を設定する。第一に、家族内関係、ここでは少女に焦点をあてることから特に親子関係が、どのような心性によって結ばれ、また、それが時代とともにどのように変化していくのか、という視点であり、第二に、そのような親子関係、また、家族内関係のなかで、少女はどのような存在としてとらえられているのか、という視点である。

まず、第一の視点として、家族内関係、特に親子関係が、どのような心性によって結ばれ、またそれが時代とともにどのように変化していくのか、ということを見ていきたい。そこで重要になるのは「孝」と「母性愛」（「近代的情愛」）である。近代以前の親子関係の規範は子どもから親への行為規範である「孝」つまり「親に対する子の恭順・服従」（川島 2000, 88頁）であったといわれている。「孝」は、親の「恩」によって根拠づけられているが、『恩』はすでに恵み与えられてあり、これに反し謝恩の義務は今後において履行されねばならないものである。すなわち恩恵者は権利のみをもち、受恩者は義務のみをもち、しかもその義務は無限の大きさをもち、恵みに対応する忠誠によって支えられねばならない」（川島 2000, 116頁）。このように、「孝」は、子どもが子どもである以上、無条件かつ絶対的になさねばならない、子どもから親への無限の献身であるということが出来る。それに対し、近代の親子関係を特徴づけるのは親から子どもへの行為規範である「母性愛」である（Shorter 訳書

表1 『少女の友』掲載小説の家族内関係

	少女と親の関係		実数	構成比	実数	構成比	少女ときょう だいの関係	実数	構成比
明治後期 (1908～ 1912年)	少女→親	少女→母親	35	44.9	54	69.2	少女一姉	5	17.2
		少女→父親	19	24.4			少女一妹	5	17.2
	親→少女	母親→少女	20	25.6	24	30.8	少女一兄	2	6.9
		父親→少女	4	5.1			少女一弟	17	58.6
	合 計		78	100.0	78	100.0	合 計	29	100.0
大正前期 (1913～ 1919年)	少女→親	少女→母親	21	32.3	39	60.0	少女一姉	11	37.9
		少女→父親	18	27.7			少女一妹	3	10.3
	親→少女	母親→少女	20	30.8	26	40.0	少女一兄	8	27.6
		父親→少女	6	9.2			少女一弟	7	24.1
	合 計		65	100.0	65	100.0	合 計	29	100.0
大正後期 (1920～ 1926年)	少女→親	少女→母親	25	23.6	54	50.9	少女一姉	3	9.4
		少女→父親	29	27.4			少女一妹	6	18.8
	親→少女	母親→少女	30	28.3	52	49.1	少女一兄	16	50.0
		父親→少女	22	20.8			少女一弟	7	21.9
	合 計		106	100.0	106	100.0	合 計	32	100.0
昭和初期 (1927～ 1939年)	少女→親	少女→母親	30	19.0	57	36.1	少女一姉	16	21.3
		少女→父親	27	17.1			少女一妹	12	16.0
	親→少女	母親→少女	75	47.5	101	63.9	少女一兄	30	40.0
		父親→少女	26	16.5			少女一弟	17	22.7
	合 計		158	100.0	158	100.0	合 計	75	100.0
戦時下 (1940～ 1945年)	少女→親	少女→母親	10	12.7	22	27.8	少女一姉	9	33.3
		少女→父親	12	15.2			少女一妹	0	0.0
	親→少女	母親→少女	42	53.2	57	72.2	少女一兄	14	51.9
		父親→少女	15	19.0			少女一弟	4	14.8
	合 計		79	100.0	79	100.0	合 計	27	100.0

注1) 「少女→親」(「少女→母親」・「少女→父親」)は少女から親(母親・父親)への献身,「親→少女」(「母親→少女」「父親→少女」)は親(母親・父親)から少女への献身を示す。

注2) 「少女一姉」,「少女一妹」,「少女一兄」,「少女一弟」は少女とそれぞれ(姉,妹,兄,弟)の情緒的な結びつきを示す。

注3) ここでの時期区分は、『少女の友』の主筆の交代など,経営戦略上の雑誌づくりの変化と,それにとまなう掲載小説の家族内関係の質的变化から設定している。

資料:『少女の友』実業之日本社刊(大阪国際児童文学館所蔵)

1987)。これは、「孝」とは逆に、親から子どもへの無条件の献身であるといえる。

ただし、近代家族のなかで母親だけが子どもを愛するようになったと考えるのは短絡的であり、「母性愛」のみに注目して近代の親子関係をみていくのでは充分とはいえない。そのため、本稿では、母親だけでなく父親も含めた親から子どもへの無条件の献身という概念を設定し、それを「近代的情愛」と呼ぶことにする。また、同様に、親子関係のみに注目して近代の家族内関係をみていくのでも充分とはいえない。家族内構成員すべての関係について、前近代は、「人間の中に生れながらの上下尊卑をみとめ、上下尊卑の秩序を絶対不可侵のもの」とするため、「人と人とを結ぶ紐帯は親和の情にではなく、形式的な礼儀に求めるほかはなかった」（木下 1957, 80頁）といわれているが、近代以降、家族内構成員すべてが親しみあい慈しみあうという、ショーターの「家庭愛」（Shorter 訳書 1987, 215頁）ともいうべき情緒的な関係で結ばれるようになったといわれている。このようなことを踏まえながら、家族内構成員すべてと少女の関係をみていきたい。

第二の視点として、そのような親子関係、また、家族内関係のなかで、少女はどのように語られているのか、ということをもていきたい。それには、近代の女性に対するまなざしの代表的なものである良妻賢母主義思想とのかかわりからそれをみていく必要があるだろう。小山は、良妻賢母像が変遷していくさまをとらえ、江戸時代の女訓書が語る「女を男に比べて愚かなものとし、劣等視する価値観のもとで、夫や舅姑に対して従順な妻や嫁となる」女性像から、日清戦争後、「まず子どもを育て、教育する母役割が、やがては家事を責任をもって遂行する妻役割が強調され」る良妻賢母像が女子教育論で語られるようになると指摘する（小山 1991, 234頁）。また、牟田は、このような母役割・妻役割の強調から、「女性は必ずしも劣ったあるいは柔弱な存在であるべきではなく、教育と自主性が求められる」ようになったと指摘する（牟田 1996, 69頁）。さらに、第一次世界大戦後、「職業への従事や『女の特性』を通じた国家・社会への直接的な貢献をも要求され」る新しい良妻賢母像が語られるようになるという（小山 1991, 234-235頁）。先にも述べたように、このような良妻賢母というまなざしのみが「少女」に向けられていたとは考えにくい。そして、そのような良妻賢母とは別の「少女」へのまなざしを、少女雑誌はあらわしていたと考えられるのである。そのため、このような良妻賢母像の変遷を一つの鏡としながら、少女雑誌における少女像の変遷をあきらかにしていきたい。

最後に、分析する時期は創刊の1908（明治41）年から敗戦の1945（昭和20）年までである。この期間毎年原則的に1月号と8月号を分析することにする。なお、ここで

1月号と8月号を選んだのは、1月号が連載小説の開始の号で、しかもその年の編集方針があきらかにされる号であるから、また8月号が1年の中間の号に位置する号のうち比較的欠号の少ない号であったからである。『少女の友』は大阪国際児童文学館に所蔵されているものを分析の対象としている。分析対象の号に欠号がある場合、その年に発行された別の月の号を扱うことにする。

3. 分析の結果

3.1 明治後期・1908～1912（明治41～45）年：親には絶対服従

創刊のころの親子関係をみると、まず、①孝で結ばれた親子関係、次に、②孝と近代的情愛で結ばれた親子関係、という二つの親子関係が語られている。①の孝で結ばれた親子関係は少女から親への一方向的な恭順で結ばれている。このような親子関係のなかで、少女は、④どのような親であろうとひたすら盲目的にしたがう孝行娘として語られている。これがこの時代の一つめの少女像である。

たとえば、大酒を飲んで怒鳴りちらし、やつあたりをする両親にも文句一つ言わず「すみませんでした」と頭を下げ、つくす（渡邊白水「不具の両親を助けて家を再興した孝女おとらの美談」明治41年12月号）、冷たくふるまう病気の母親にも畳にひたいをこすりつけて看病をさせてくれと懇願し、看病しつづける（尾島菊子「なさぬ仲」明治44年8月号）、母親が酒を飲みながら三味線を聴きたいと望むため、それまで習っていた大好きな琴をやめて三味線を習う（長谷部湘雨「お稽古」明治41年12月号）などの小説である。

この親子関係は、まさに、子どもが子どもである以上、身分的・絶対的に親に恭順しなければならないという、負債、負い目としての孝で結ばれた関係だといえる。しかも、親は少女に無関心か威圧的、少女は親をひたすらおそれうやまい、盲従するのみであり、そこに情緒的な紐帯はほとんどない。そして、少女は親の強大な力の前にあまりにも無抵抗かつ無力なものとして語られ、たとえ親が間違っている、愛情を示さなくても、少女は絶対に親に孝行するものとして語られているのである。

また、②の孝と近代的情愛で結ばれた親子関係は、親から少女への慈しみや少女から親への親しみがみられ、近代的な情愛で結ばれた関係であるといえる。しかし、同時に、そこには、少女から親への盲目的かつ絶対的な服従も語られている。すなわち孝もみられるのである。ただし、重要なこととして、そこで少女に近代的情愛を示すのは母親と女きょうだい、弟のみであり、父親・家父長は少女に無関心で、両親が登場する場合でも父親はまったく描写されず（たとえば、後述の与謝野晶子「紅葉の

子」明治42年11月号), 兄・家父長の後継者は, たとえば, 妹にあたりちらして「残酷な目に合は」すとされる富岡鼓川「雛の灯」(明治43年3月号)のように, 少女に威圧的な態度をとるものとして語られ, 少女も父親に無関心, そして, 兄をおそろしい存在と認識している。そのため, そもそも彼らはその存在自体ほとんど語られることがない(表1)。このような親子関係のなかで, ⑥母親の監督と指導を常に必要とするような無知で無能力な少女, が語られている。これがこの時代のもう一つの少女像である。

たとえば, 高信峽水「光ちゃんのお裁縫」(明治41年10月号)では, 母親は裁縫をしたがる光ちゃんに雑巾を縫うことを許し, 針に糸を通してやり, 指に針を刺せば包帯をしてやるものの, 光ちゃんが火熨斗をかけたがると, 「そんな雑巾になんか火熨斗をかけるものがあるもんですか。火熨斗がきかなくなるからいけません」と叱りつけ, 光ちゃんはそれにしたがう。このように, 裁縫をしたがる少女に望むとおりのことをしてやるものの, それが限度を越えると母親は厳しく叱りつけ, 少女はそれに絶対的にしたがうものとして語られる。それは, 紅葉狩りへ連れていってもらった少女が, 「叱られませんか」と母親の許しを得てから紅葉を拾う(与謝野晶子「紅葉の子」明治42年11月号), 母親は少女の着物を縫ってやるものの, 少女がその着物のすそをほしがると「いけません」と叱りつけ, 少女はそれを聞き入れる(小野美智子「肩上げと縫ひ込み」明治41年12月号)などの小説にも, 同様に見出せる。

少女は, 母親の意向に沿うかたちでのみ慈しまれ可愛がられて気ままなふるまいが許されるものの, ひとたび母親の意向にそぐわないふるまいをすると母親にたしなめられ, 絶対的な服従を強いられる。そのため, 少女は, どんなときにも母親の意向をうかがい, 母親の指導をあおぎ, それに盲従しようとしている。

同じころ, 女子教育論では, 小山によれば, 日清戦争後の明治28(1895)年ごろから, 「まず子どもを育て, 教育する母役割が, やがては家事を責任をもって遂行する妻役割が強調され, そのための女子教育の充実が主張されていた」という(小山 1991, 234頁)。さらに, 牟田は, このような母役割・妻役割を重視する見方の登場から, 女性に「教育と自主性が求められる」ようになったとしている(牟田 1996, 69頁)。しかし, このような良妻賢母像につながる「教育と自主性」(牟田 1996, 69頁)は, 『少女の友』の少女像にはみられない。むしろ, ④⑥ともに無知・無力で親(母親)に盲従するしかないという描かれ方がされており, それは封建期の女性観に特徴的な「女を徹底して愚かな存在と考える女性観」(小山 1991, 20頁)につながるものといえよう。

3.2 大正前期・1913～1919（大正2～8）年：近代的情愛を根拠にした孝

しかし、大正に入るところから、まず、明治後期の②の孝と近代的情愛で結ばれた母親と娘の親子関係が、しだいに多数派となるとともに、明治後期の①の孝だけで結ばれた親子関係は少数派となり、ついにはほとんどみられなくなる（表1）。そして、それだけでなく、そこで語られる孝に変化がみられるようになる。以下、具体的にみていく。

大正に入ると、『青鞥』の創刊に象徴されるように、女性の置かれている状況が「問題」としてとらえられ、「婦人問題」が社会問題として認識されるようになる（小山 1991）。このような動きに対応するように、『少女の友』でも悲劇的な小説が流行し、そのなかで、悲惨な境遇に疑問をもち、自由と自己実現を求めて苦悶する少女が繰り返し語られるようになる。このなかで、④自分の親（母親）によって自由と自己実現が妨げられている場合、少女は結局母親の自分への愛情に気づき、それに応えようとして自ら自由と自己実現への欲求を抑えつけている。これがこの時代の一つめの少女像である。

たとえば、山のなかで病気の母親の看病をしている少女が、夢と向上心に燃えて山の向こうへ行くことを決意するが、母親の自分への愛情に気づいて踏みとどまる（山田邦子「あの山を越えて」大正2年1月号）、父親が死んで家計が苦しくなったため、6人の息子がいるなか少女だけが叔父の家にひきとられることになり、少女は嘆き苦しむものの、母親と兄、弟の愛情に気づき、それにしたがうことにする（江口千代「冬の来る頃」大正6年1月号）などの小説がそれである。

そして、⑤親（母親）が登場しない場合、あるいは、親（母親）以外によって自由と自己実現が妨げられている場合に限り、少女は自由と自己実現への欲求をもちつづけ、それをかなえようと苦悶しつづけている。これが二つめの少女像である。

たとえば、孤児院の少女が使用人を酷使する人物のもとへ女中としてひきとられそうになるものの、「私は自分独りで一人前の立派な女にならなければならぬ」と抵抗し、東京へ逃げる（岩下小葉「みなし児」大正3年1月号、8月号）、人身売買で娘曲芸団に売られた少女が自由を求めて苦悶する（江見水蔭「飛ぶ少女」大正2年1月号）、被差別部落に生まれた少女が村の人々のひどい差別に苦しむものの、「都の人間らしい生活」を求め、村を出る（宇野浩二「国境の峠に注ぐ涙の雨」大正4年8月号）などの小説にあらわれている。

この二つの少女像が示すのは、少女は自由と自己実現への欲求をもつとされるものの、それは基本的に親への孝行とは相容れないものであり、万が一それらがぶつかり

あったときは必ず、親への孝行が少女の自由と自己実現よりも優先されるということなのである。

このような、母親の少女への思いやりにより自由と自己実現を放棄して少女が孝行をつくすという親子関係には、母親から少女への近代的情愛と、少女から母親への孝がみられ、これは、明治後期の②でみられたような母親と少女が親しみあい慈しみあう関係であるといえる。しかし、そこでの少女から母親への孝行は、母親から少女への愛情あるいは献身の結果として生じるものとして語られている。ここに孝のあきらかな変化がみられる。孝が、これまでの、自然発生的な親の恩を根拠にした、身分的かつ絶対的な、子どもから親への献身として語られるのではなく、親からの近代的情愛を根拠にした、子どもから親への献身として語られているのである。すなわち、子どもであるからこそ親へ献身するのではなく、親に愛されているからこそ、そのお返しとして親へ献身する、という内容へ変化しているのである。孝が近代的情愛に裏打ちされたものに变化したと考えられよう。

有地は、「明治の半ばには、親が誤っていても、それに従うのが孝だと儒教主義による絶対的服従の孝が説かれていた。しかし、大正の初めになると、親の行為についても、是々非々主義で公平に対処するのが孝であると変ってきている」（有地 1986, 76-77頁）と指摘している。また、尾花・広井の国定修身教科書分析でも、『少女の友』の場合とやや時期を遅くするものの、国定三期（大正7年～昭和7年）からの修身教科書において、「まず親の慈愛や養育があり、その結果として、子どもの敬親という観念が生まれる」という近代的情愛を根拠とする孝への変化を指摘している（尾花・広井 1994, 176-177頁）。

また、大きな変化として、少女と情緒的关系を結ぶ相手に新しく家父長の後継者である兄が語られるようになっている。それまでほとんど登場しなかった兄が、近所の子どもたちにいじめられている妹のために一緒に池に身を投げる（菅野菊枝「甦らんとして」大正7年1月号）などのように、思いやりを示しあう、娯楽を共有するなどして、少女にとっては親しみのある存在として頻繁に登場するようになるのである（表1）。そして、時代がすすむにつれ、少しずつではあるものの、それが家父長である父親にも拡大されていく。

すでに述べたように、この時代、女子教育論において教育と自主性をもつ良妻賢母像が求められていたが（牟田 1996）、この時代の少女像は、盲目的にではなく一定の自主性をもって家族につくしているという意味において、それにつながるものであったと理解することができよう。ただし、少女が自由と自己実現への欲求をもって

いるものとして語られているという意味において、女子教育論の良妻賢母像にはみられない少女像をも内包しているといえる。しかしながら、その少女像は、結局、自由と自己実現よりもまず親への孝行を優先させるべきであるという文脈のなかで語られているのであった。

3.3 大正後期・1920～1926（大正9～15）年：孝から近代的情愛へ

しかし、第一次世界大戦後の大正8（1919）年、大正9（1920）年ごろから、一つめに、そのような近代的情愛に裏打ちされた孝のなかでも、自己をやみくもに犠牲にするような孝については、たとえば、亡き母親のことを思いつめているしづ子という少女に、母親が夢のなかでそれを「しづ子ちゃんの体に毒だからね」と諭す（財津あずさ「ピアノよさようなら」大正14年1月号）などように、親が少女への愛情ゆえに懸念を示すようになる。また、二つめに、母親から少女への近代的情愛がますます頻繁に語られ（表1）、特に大きな変化といえるのは、これまで少女の視点から母親の台詞やふるまいなどの外面的な様子をとおして母親の近代的情愛が語られていたが、新しく、母親の視点から母親の心性を詳細に吐露することをとおして、母親の近代的情愛そのものが語られるようになっていく。たとえば、体の弱い子どもは7歳になるまで髪を剃りつづけなければならないという因習から、母親が嫌がる娘の髪を剃りつづけ、娘が7歳になってすぐ病気で死んでしまうと、母親は娘の髪にリボンをかけてやりながら後悔して泣く（北川千代子「黒髪」大正12年8月号）などの小説である。このように、母親の視点から母親の娘への愛情が詳細に描写されるようになるのである。これらの変化は、『少女の友』において、孝よりも近代的情愛のほうがその比重を高くしてきていることを示していよう（表1）。

しかし、このように近代的情愛がますます語られるようになっていっても、依然として、少女の自由と自己実現への欲求は孝行と相容れないもの、むしろこの時代、たとえば少女の上京を「お前のたつた一人のお母さんをおき去りしてかい？」と母親が激しくなじる（岡田光一郎「もう一人の蔦子」大正14年8月号）などのように、はっきりと親への不孝に結びつくものとして語られている。そして、そうであるからこそ、少女はそれを捨てて親へ孝行をするべきものとして語られているのである。このように相変わらず少女の親への孝行が繰り返し語られているため、このころの少女像はまったく正反対の方向へ分裂してしまっている。第一の少女像は、①自分の才智や行動力をいかして積極的に親（ひいては家族）のためにはたらく少女、である。しかも、そこで少女がおこなうのは家事や家内労働ではなく、たとえば、母親のために事務員とし

近代家族と「少女」の国民化

てはたらく（渡邊霞亭「十年の後」大正11年4月号）、病気の母親のとめるのもきかずに母親のために製糸工場ではたらく（渡部清子「熱涙」大正12年8月号）、母親と兄のために工場ではたらく（大澤重雄「兄帰るまで」大正13年8月号）など、企業や工場などではたらくという賃労働なのである。

この時代、女子教育論では女性に対し、家庭内役割だけでなく職業の従事や「女の特性」の発揮などをつうじた国家への貢献をする、新しい良妻賢母像を女性に求めるようになった（小山 1991）といわれるが、まさにこの少女像にみられる職業への従事はそれにつながるものであったといえよう。ただし、女子教育論で妻や母である女性たちに求められた職業への従事は、あくまでも妻として母親としての役割から逸脱しないことを前提とした家内労働や補助的労働への従事にすぎなかったが（小山 1991）、この少女たちが家族のためにおこなうのは企業や工場ではたらくという、男性なみの賃労働なのである。

第二は、⑥親（ひいては家族）の反対に苦しみながらも自分の才智や行動力をいかして自由と自己実現をかなえようとする少女である。大正前期において、少女の自由と自己実現への欲求は親の少女への愛情に応えるため、少女自らによって放棄されていた（大正前期の④の少女）。それが、ここにきて、たとえそれが親への不孝になったとしても、少女は自由と自己実現を追求しつづけるようになったのである。これは女子教育論の良妻賢母像にはまったくつながらないもの、むしろそれを否定してしまうようなものですらである。

たとえば、音楽の海外留学か母親のそばで孝行をするか二つの選択に引き裂かれるが、結局、恩師の強いすすめで海外留学を選ぶ（横山美智子「海鳥は唄ふ」大正14年8月号）、東京の女学校へ特別に給費生として進学することが決まったものの、そのことで両親に悪態をつかれいじめぬかれ、苦悶しながらも小学校の先生の説得により進学を果たす（岩下小葉「水車屋の娘」大正13年8月号）、母親に不孝者とののしられながらも演劇の道へ進む（石川星影「二つの道」大正12年8月号）、などの小説である。

そして、このころから、近代的な情緒的關係が兄はもちろん父親にも拡大され、兄と父親は少女にとって親しみあう存在となる。たとえば、父親が少女に買い与えた人形が火事で焼けてしまい、少女はそれを嘆き悲しむものの、父親と一緒に人形の着物のほしくれで人形の墓を作ることと慰められる（西谷勢之介「人形塚」大正15年10月号）などのように、父親も少女に思いやりを示すようになるとともに、兄と父親の出現頻度自体も増し、母親や女きょうだい、弟の出現頻度とそれほど大きな差はなく

なっている（表1）。

3.4 昭和初期・1927～1939（昭和2～14）年：近代的情愛のもとで自己実現する

昭和に入ると、まず、親子関係にあきらかな変化がみられるようになる。母親から少女への近代的情愛がますます多く語られるとともに、新しく、父親から少女への近代的情愛も語られるようになっていく。逆に、大きな変化として、少女から母親、父親への孝行がほとんど語られなくなっている（表1）。

たとえば、囚人であったという過去をもつために母親であることをあかさず、看護婦として娘の看病をし、娘の未来に傷をつけることをおそれて自らの命を絶つ（三條さよ子「銀の十字架」昭和6年5月号）、父親だということをあかさずに娘に仕送りをつづける（木蘇穀「悲しき父と娘」昭和4年6月号）、娘を官邸でおこなわれる夜会に出席させるために父親が貯金を下ろすなどして苦勞する（居猿澤信吉「夜会の花」昭和4年6月号）などの作品である。

このように、母親はおろか父親も一切の見返りを求めずに娘に愛情を注ぐようになっていくのである。このような物語はこれまでの『少女の友』ではみられなかった物語である。このような親子関係は、親、特に母親が子どもを愛護し教育するのが当然であるとする近代的情愛で結ばれた親子関係であるといえよう。

そして、それにともない、少女像にも変化がみられる。少女は、家族に愛され支えられているからこそ、自由を謳歌し、のびのびと自己主張し、自分の思うがまま自己実現する存在として、語られるようになっていくのである。

たとえば、ヴァイオリンの才能のある少女とピアノの才能のある少女を、それぞれの両親やきょうだいが、音楽学校へ入学させようとするなどして応援し、少女たちは様々な困難を乗り越えて音楽の道に進む（横山美智子「嵐の小夜曲」昭和4年6月号～昭和5年7月号、遠藤 1993a, 47-157頁）、家族総出で少女の女学校受験を応援し、少女は受験勉強とそれにまつわる友情にのみ心悩ませる（吉屋信子「街の子だち」昭和9年1月号～12月号、遠藤 1993b, 103-197頁）、女学校の校則に反し、制服を流行のかたちで改造する自由奔放な少女に、母親はそれを許し、どこまでもやさしく世話をする（島本志津夫「短い上衣」昭和13年1月号）などの作品である。

これは、女子教育論の良妻賢母像にまったくつながらないもの、むしろまったく否定してしまうものであるといえる。このように、少女は家族のなかで愛護される子どもとして位置づけられるようになり、それとともに家族内構成員相互が情愛で結ばれる近代家族のイメージが定着したといえよう。親、特に母親に応援されながら、受験

勉強に打ち込む、あるいは、こっそり制服を改造する、というようなここでの少女たちをみると、現代の少女たちとほとんど変わらないように見える。

このように、「少女」が親につくすものからつくされるものになり、自己への配慮を何よりも優先できるようになったのがこの昭和初頭であった。しかし、驚くべきことに、それは「少年」とくらべるといちじるしく遅い変化であった。木村によれば、「自己への配慮」(木村 1998, 290頁)を最優先できる「少年」が誕生したのは、明治20年代初頭であるという。そして、それは、少年雑誌『少年世界』(明治28年創刊)が創刊のころから親に応援されながら少年が立身出世する小説を多く掲載していたように(久米 1997)、少年に立身出世を求める考え方と深く結びついていた⁽⁸⁾。しかし、同じころ、「少女」はそうにとらえられていない。少なくとも明治30年代後半に誕生した少女雑誌は少年雑誌とは別の意味をもつものであった。たとえば、『少女の友』でも、その「発刊の辞」で、「親の言ふ事を聴くことや「先生の教に」したがう「習慣」を身につけさせることを目指すと断言している。「少女」が「少年」のように「自己への配慮」(木村 1998, 290頁)を最優先でき、自分自身の将来のことを考えられるようになったのは、これまでの分析からあきらかになったように、「少年」よりも40年も後のこの昭和初頭のことだったのである。

3.5 戦時下・1940～1945(昭和15～20)年：近代的情愛のもとで忠を選びとる

太平洋戦争に突入し、人気画家・中原淳一の追放など、『少女の友』に軍部からの圧力が加えられるようになると(内山 1977)、『少女の友』に国家という概念が前面にでてくる。しかし、そこで語られる親子関係は忠孝一致の親子関係ではない。そこで語られる親子関係は少女から親への孝ではなく、昭和初期に引き続き、親から少女へのなんの見返りも求めない近代的情愛であり、むしろそれはますます頻繁に語られているのである(表1)。しかし、だからといって、それは決して国家と無縁のかたちで語られるのではない。むしろ、少女と国家とのつながりをうながすものとして語られているのである。それはこの時代の家族内関係のなかで語られる少女像に典型的にあらわれている。以下、具体的にみていく。

この時代の『少女の友』の少女たちは、親からの献身という近代的情愛に応援されながら、まず、太平洋戦争勃発直後は、それまで自分自身の自由と自己実現のためだけに生きていた少女たちが、④社会のためにはたらく、と語られるようになる。また、⑤親(ひいては家族)のためにはたらく、とも語られるようになっている。ただし、⑥で少女が親へ献身する場合でも、その目的はあくまでも社会・国家への貢献に

ある。少女は親への献身が社会・国家への貢献に結びつくと考え、あえて親への献身を選びとっている。つまり、少女は親への献身という孝ではなく、親へ献身することによって社会・国家に献身するという忠を、主体的な存在、すなわち国民として積極的に選択しているのである。そして、戦争が激化するにともない、㉔国家のためにはたらくという少女像へ、すべての少女像が統一される。そこにおいて、少女は家族に応援されながら、主体的な国民として農作業や工場労働というような男性とほとんど変わらない直接的な国家貢献をおこなうものとして語られているのである。

たとえば、㉒は、向学心に燃え女子大学への進学を希望していた少女がそれを取りやめて貧しい子どもたちのために保母としてはたらくことを決め、両親もそれを認める（内山基「白い燈台」昭和15年1月号）、二人の少女が全盲あるいは聾啞の子どもたちのためにはたらき、一人の少女の母親がそれを応援する（川端康成「美しい旅」昭和14年7月号～昭和16年4月号、「続美しい旅」昭和16年9月号～昭和17年10月号、川端 1981, 399-658頁, 659-733頁）などの作品にみられ、㉓は、家内労働に不満をもつ少女が、あるときそれが銃後のつとめであることに気づき、母親にほめられながら積極的におこなうようになる（由利聖子「次女日記」昭和14年8月号）、将来の兵士かその妻を産むことになることを認識する姉の出産を妹が積極的に手助けすることを決め、母親はそれを「本人の将来のためになる」と認める（島本志津夫「病院の窓」昭和17年1月号）などの作品にみられ、㉔は、軍需工場で寝泊まりしながらはたらく妹を看護婦の姉が励ます（中里恒子「寄宿舍にて」昭和19年8月号）、少女が母親とともに労働奉仕として農村で農作業をする（芹澤光治良「けなげな娘達」昭和17年8月号）、母親や姉とともに国のためになぎなたをあやつって敵と戦い、敵の捕虜になる前に親子あるいは姉妹の情を確認しあいながら自害する（大地唯雄「命のかぎり」昭和20年4月号）などの作品にみられる。

このように、家族に見守られながら主体的かつ積極的に国家貢献し、たとえば、「今までなんか大勢の前で話をするのなどきまりが悪かったのに」、「一生けんめい働いてゐると、大事でないことなんぞ忘れきつてしまふ」から、「気持ちだんだん大きくなる」と語るような（「寄宿舍にて」）、その国家貢献に喜びを見出す少女の姿が語られるようになっている。

4. 結 論

『少女の友』の表象における少女と家族との関係は、明治末から大正末にかけて、それまでの少女から親への一方向的かつ絶対的な献身である孝が、親の近代的情愛を

近代家族と「少女」の国民化

根拠とした少女から親への献身へと変化していき、昭和の初めごろから、孝ではなく、親から少女への見返りを求めない献身という近代的情愛で結ばれた関係となる。しかも家族内構成員の情緒的な紐帯は時代をおうごとに拡大、強化されていく。そうして、親とりわけ母親が少女を愛護するようになったからこそ、少女は孝から解放され、少女は自己への配慮を何よりも優先させることができるようになった。そのため、昭和初頭、少女たちは、親やきょうだいに応援されながら自由を謳歌し、自己実現を追求するものとして語られるようになった。つまりは、女子教育論が理想として掲げていた良妻賢母像とは大きくかけ離れた少女像が登場するようになるのであった。そして、戦争が開始されるとその少女の主体性が戦争のためにうまく利用される。少女は、親やきょうだいに愛護され、支えられながら、主体的な国民として国家貢献をおこなっていくのであった。ここからみえてきたのは、少女が、近代家族のなかで「子ども」として愛護されることによって、主体的かつ直接的な「国民」となっていくプロセスであった。その国民化は、決して、国家からの良妻賢母主義教育という回路から生まれたわけではない。また、少年のように、「直接的な国民」になるべきものとして、国家からの学校教育およびそれに先導された家庭教育という回路から生まれたわけでもない。家族内の情緒的関係の変化が、少女を孝から解放し、愛され慈しまれながら、自己への配慮を何よりも優先できるような「子ども」になったからこそ、少女は国家の積極的なはたらき手となることができたのである。つまりは「直接的な国民」となることができたのである。国民国家論的近代家族論は、国家による家族への干渉から、人々を国民国家に編入する装置として、国民国家の意図に沿うかたちで、家族が再編されていったと考えがちである⁽⁹⁾。もちろん、それは間違いではないし、そのような関係があったことは確かであろう。しかし、本稿からみえてきたのは、むしろ、国民国家から家族へ、あるいは国民国家から個人へという一方向的な関係ではなく、家族内の情緒的関係の変化が新しい主体化を生み出し、それを国民国家が回収するという、国家と個人的情緒の間の相互作用的な関係なのである。

しかしながら、本稿でおこなったのはあくまでも少女雑誌における表象であって、実態の分析ではない。実態としての少女の変遷をあきらかにするのはのちの課題としたい。

〈注〉

- (1) たとえば、牟田 (1996)、小山 (1991, 1999)、西川 (1990)、沢山 (1990)。
- (2) たとえば、永原 (1985)。

- (3) 久米（1997）によれば、「少女」という呼称が、そもそも年少者全体を表していた「少年」から分離し、それまでの「女子」に代わって一般化したのは明治30年代だという。
- (4) 『少女の友』の少女像のみの分析は、今田（2000）を参照されたい。
- (5) 実業之日本社に『少女の友』の発行部数の記録は残っていないが、『少女倶楽部』が創刊の1923（大正12）年に6万7千部を発行、最高発行部数が1937（昭和12）年の49万2,000部であったことから（大阪国際児童文学館 1993）、それよりもやや劣る程度の発行部数であったと考えられる。
- (6) 『少女の友』は、1908（明治41）年、実業之日本社から創刊され、小学上級生から女学生を読者対象にした（大阪国際児童文学館 1993）。創刊のころこそ、初代主筆の星野水裏が教育者的な信念をもって誌面をつくりあげようとしていたが、昭和初頭、宝塚少女歌劇関係のグラビアや読みものをふんだんに載せることで対象読者を大都市の女学生にしぼり込み、特に1931（昭和6）年からの主筆内山基のもとで、独自の地位を築きはじめる（遠藤 1993 a）。
- (7) 有山によれば、1926（大正15）年の京都市役所社会課の「職業婦人に関する調査」で、雑誌を読む者は79.9%、しかしながら、趣味に関する質問で約84%が不明で、最高のキネマでも7%にすぎず、「女性の社会進出といっても、女性の自由な外出を阻む社会的制約が一因となっていただろう。そして、繁華街の娯楽である映画などの代用として婦人雑誌があったのではないか」（有山 1984, 41-42頁）と、考察する。少女雑誌も同様の傾向があったと思われる。
- (8) そして、見田は、このような立身出世主義を、近代化の「内面的、主体的な推進力」であった（見田 1971, 185頁）と指摘している。
- (9) たとえば、ドンズロ（Donzelot 訳書 1991）、牟田（1996）。

〈参考文献〉

- Ariès, Philippe 1960, 杉山光信・杉山恵美子訳『〈子供〉の誕生』みすず書房, 1980。
- 有地 亨 1986, 『日本の親子二百年』新潮社。
- 有山輝雄 1984, 「192, 30年代のメディア普及状態—給料生活者, 労働者を中心に—」『出版研究』15, 30-58頁。
- Donzelot, Jacques 1977, 宇波彰訳『家族に介入する社会』新曜社 1991。
- 遠藤寛子編 1993 a, 『少年小説大系 第24巻 少女小説名作集(1)』三一書房。

- 1993b, 『少年小説大系 第25巻 少女小説名作集(2)』三一書房。
- 本田和子 1990, 『女学生の系譜—彩色される明治—』青土社。
- 今田絵里香 2000, 「少女雑誌にみる近代少女像の変遷—『少女の友』分析から—」
『北海道大学大学院教育学研究科紀要』82, 121-164頁。
- 川端康成 1981, 『川端康成全集 第20巻』新潮社。
- 川島武宜 2000, 『日本社会の家族的構成』岩波書店。
- 木村直恵 1998, 『〈青年〉の誕生』新曜社。
- 木下 明 1957, 「親子思想の諸問題」中川善之助編『家族問題と家族法Ⅳ 親子』
酒井書店, 75-115頁。
- 小山静子 1991, 『良妻賢母という規範』勁草書房。
- 1999, 『家庭の生成と女性の国民化』勁草書房。
- 久米依子 1997, 「少女小説—差異と規範の言説装置—」小森陽一・紅野謙介・高橋
修編『メディア・表象・イデオロギー』小沢書店, 195-222頁。
- 見田宗介 1971, 『現代日本の心情と論理』筑摩書房。
- 牟田和恵 1996, 『戦略としての家族—近代日本の国民国家形成と女性—』新曜社。
- 永原和子 1985, 「女性統合と母性—国家が期待する母親像—」脇田晴子編『母性を
問う—歴史的変遷—』人文書院, 192-218頁。
- 西川祐子 1990, 「住まいの変遷と『家庭』の成立」女性史総合研究会編『日本女性
生活史第4巻 近代』東京大学出版会, 1-49頁。
- 尾花清・広井多鶴子 1994, 「学校が教える家族—国定修身教科書の分析—」『大東文
化大学紀要』32, 161-182頁。
- 大阪国際児童文学館編 1993, 『日本児童文学大事典 第2巻』大日本図書株式会社。
- 坂本佳鶴恵 1997, 『〈家族〉イメージの誕生』新曜社。
- 沢山美果子 1990, 「子育てにおける男と女」女性史総合研究会編『日本女性生活史
第4巻 近代』東京大学出版会, 125-162頁。
- Shorter, Edward 1977, 田中俊宏他訳『近代家族の形成』昭和堂 1987。
- 内山 基 1977, 「編集者の思い出 或るさしえ画家のこと」『MODE et MODE』
174, 196-197頁。
- 山村賢明 1971, 『日本人と母—文化としての母の観念についての研究—』東洋館出
版社。

ABSTRACT

The Modern Family and the Nationalization of "Girls":
As Seen from the Girl's Magazine *Shojo-no-Tomo*

IMADA, Erika

(Graduate School, Kyoto University)

Nihonmatsu-cho, Yoshida, Sakyo-ku, Kyoto, 606-8501 Japan

Email: Erica@ma5.seikyou.ne.jp

This paper attempts to clarify how the "modern girl" became an ideology, to explain the actual conditions under which it became an ideology and to investigate what kind of changes followed. The popular magazine *Shojo-no-Tomo* is analyzed from two different points of view. The first concerns how the family is emotionally interrelated. The second concerns the "girl's" position in such a family.

The results of the analysis are as follows. From the end of the Meiji Era through the end of the Taisho Era, the relationship between the girl and her family was one in which there was a unidirectional, absolute devotion from the girl to her parents, which became the basis for the parents affection. This is traditionally known as "*ko*". However, starting at the beginning of the Showa Era, the relationship changed from "*ko*" to a relationship of modern affection and devotion, where the parents did not expect girls to reciprocate their affection with absolute devotion. As time passed, this bond of affection was expanded and strengthened. Thus, with the encouragement of family members, girls learned to pursue freedom and self-realization, by being set free from the restraints of "*ko*", and were able to give priority to considerations of themselves. That girl's image was different from the image of *ryosaikenbo* ("good wife, wise mother") that was taught in schools. During the War, this new identity served the girls well, as they were able to make contributions to the state as independent individuals with emotionally support from their families. The conclusions of this paper show the process by which the "girl" within the family has become an independent and personally involved "national." Therefore, within the family, the change of emotional relations has brought forth a new independence, which in turn expresses a change in the way that the "state" and the "individual" relate to one another.